

頸肩腕部や腰部などに疼痛を有する整形外科疾患の外来理学療法の頻度は多く、疾患ごとの典型的な運動療法に加えモビライゼーション、マニピュレーション、ストレッチなどの徒手的なアプローチに高い関心が集まっている。しかし、ややもすれば狭義の徒手療法の第一主義になりがちであり、症状や治療経過によっては関節可動域運動、筋力増強運動などを含めた包括的な徒手的運動療法が重要である。

そこで本特集では徒手的運動療法の適応範囲、客観的な効果はどうか、などに触れていただき、徒手的運動療法の現状と課題を明らかにしたい。

■徒手的運動療法の現状と課題—整形外科疾患を中心に（藤縄 理論文）

神経筋骨格系組織の機能異常に対する理学療法のうち、セラピストの徒手的な治療手技と運動療法、そして患者自身が機能異常の原因を理解して積極的に治療に参加するように指導することも含めたアプローチを「徒手的な運動療法」という。系統立てた評価により、機能異常を起こしている組織とその原因を見出し、効果的で効率的な治療を行う。この治療体系は、構造的アプローチと機能的アプローチからなる包括的アプローチである。

■頸肩腕部の痛み、シビレに対する徒手的運動療法（高橋 洋論文）

頸肩腕部の痛み、シビレの原因を探すためには、①頸部固有組織以外の部位の可能性、②疾患名からの発現と考えにくい症状の混在の可能性、③軟部組織、骨関節組織、神経組織その他のどれが原因組織なのかを、十分考察する必要がある。筋組織は外部ストレスに対して最初に対応し、しかも限界張力が他の組織に比べ少ないため、他の組織が傷害されている場合でも同時に筋が傷害されている可能性が高い。臨床的にも筋組織由来と考えられる症状が多く、関連した症例を提示した。頸椎牽引・ストレッチング・モビライゼーション・筋力強化・筋膜に対する徒手療法の有効性と問題点について言及した。

■肩関節周囲炎（いわゆる五十肩）に対する徒手的運動療法（中山 孝、他論文）

肩関節周囲炎は中年に多発する一連の疼痛性制動症を包含した症候群である。本稿ではその中で原因と病理診断の明確な疾患を除いた一群をいわゆる五十肩として、その徒手的運動療法の評価、治療目標と具体的な方法について説明した。また、臨床経験上の私見と文献的な考察を加え理学療法効果についても言及した。発症後、2年以内に治癒する 경우가多いが、症例ごとの肩関節複合体の機能を多角的に捉えた徒手的運動療法が重要である。

■上腕骨外側上顆炎に対する徒手的運動療法（鈴木克彦論文）

上腕骨外側上顆炎の治療にステロイド剤の局所注射が行われているが、手関節伸筋腱付着部の脆弱化を招く危険性があるため、急性期以降の徒手的な運動療法の有用性は高いと考えられる。除痛効果を高めるために疼痛の訴えや評価をどのように捉え、筋力増強運動やストレッチをどのように用いるのか、その効果について自験例をもとに紹介し、運動療法に関する諸家の報告と併せて述べる。

■腰痛症に対する徒手的運動療法（板場英行論文）

腰痛症に対する徒手的運動療法には、低可動性に対する椎間関節モビライゼーション、周辺組織の伸張運動、姿勢矯正のほか、筋活動の不均衡や低活動に対する手技がある。基本的には腰痛の主原因が椎間関節、椎間板、筋肉要素の何れかを的確な評価を背景として推論する。その上で対象患者に対し最良の徒手的治療を施行する臨床的判断能力が必要である。腰痛は多面的背景を有しており、運動療法を含めた包括的なアプローチが大切である。

【とびら/カット作者紹介】

酒井 寿（さかい ひさし）氏

1957年 東京・江戸川区に生まれる。幼少期より脊髄性筋萎縮症のため自宅療養。

1981年 国立療養所箱根病院に入院。赤岩賢三先生（国画会）の指導により絵画制作を始める。

1989年 コンピューター・グラフィック（CG）を描き始める。

1992年 永遠の彼女? Macintosh とパソコン通信に出会う。風祭@ことぶきで発信開始。

1999年 インターネット上に HP ことぶき画廊を立ち上げる。http://homepage2.nifty.com/kotobuki_garo/ 病気の進行で出来ることは限られてきたが、コンピューターを意識させない CG を追求中。